

親馬鹿、ペット馬鹿、操りペット

盛田 常夫



最近、とても気になることがある。

当地の人気タレントを娘にもつ数学者の友人宅へ呼ばれた時のことだ。変わり者の主人は食べ終えた皿を床に置き、腹を空かせた飼い犬に舐めさせた。これには招待客一同が一瞬唖然とし、声を上げた。「そりゃ不潔だよ」ところが、その主人は、「どうせ食器洗浄機で洗うのだから、何ともないよ。それに家(うち)の犬は健康で、何の病気もない」、だと。しかし、犬と皿を共用するなど、客に失礼というものだろう。

何時行っても、彼の家には必ず雑種の犬や猫が複数いる。拾ってきた犬や猫を飼っている。毛並みを見ても手入れができていないのはすぐ分かるし、舐もまったくできていない。動物は嫌いではないが、お世辞にも清潔とはいえない大きな犬が客人に近寄り、身震いして涎(つば)を周りに飛ばすのに無神経ではられない。招待された手前、客人は犬の頭を撫でながら、その同じ手でポガーチャを口に運んでいる。よく観察すると、この家族が皆、食事の準備の合間に犬を撫でている。その撫でた手で、娘の赤ん坊の口に食べ物を押し込んでいる。この衛生感覚と無神経さは、私の許容範囲を超える。堪忍袋の

緒が切れて、テーブルの肉を盗み食した犬を追いかけて、大声で怒鳴りつけた。

七、八年ほど前に、某商社所長宅呼ばれた時のことだ。家には日本から連れてきたという大きなシヤム猫がいた。肥って無愛想な猫だったが、それはどうでも良い。奥さんは猫の頭を撫でながら、せっせと食事を作っては運んでいる。食卓に貴重な刺身やサラダが並べられた。まさか、猫を撫でたその手を洗わずに生野菜を掴んだり、刺身を選び分けたりしてないよね。誰かが、気になったのか、「猫を風呂に入れるの」と聞いた。「毎日風呂に入れるよね。ママ」と、ご主人が台所にいる奥さんに相槌を求めた。返事がないので、「週に二、三回だっけ」。それでも、返事がないので、また催促するように「月に一度か」。手の空いた奥さんが、漸く答えた。「年に一度あるかないかよ」。なんとなく気まずい空気になって別の話題になったが、ペットを飼っていない客人にはホストの衛生観念が気になる。

生ものを扱っているところに、ペットは禁物だ。法政大学市ヶ谷校舎の近くに寿司屋があつて、そこからよく出前をとっていた。法政OBの店で安いというので、大学への仕出しが多かった。ある日、その寿司屋に出かけると、飼い猫が調理台の近くをうろついている。ところが、店の主人も奥さんもそれを咎める様子はない。ゼミナール講義の後にも学生と一緒にこの店から出前をとっていたが、「あそこは猫がいるから不潔」という意見が大勢を占めて、こ

大人の仕事。動物を触った手で、食べ物を掴まない。動物を触ったら、必ず石けんまで手を洗う。まして調理する人ならなおさらだ。この程度のことは最低限のエチケット。

こういうペット馬鹿の話がある年配教授に話したら、「それはペットの世界に限らないですね」と相槌を打ってくれた。たとえば、「ポーランド猫」、「チエコ猫」、「北朝鮮猫」のように、と。学問研究の世界でも、意外に「研究対象に盲目になる」人が多い。研究対象がペットのようになるのだ。いわば「馬鹿」現象である。

ある国際会議でハンガリーの現状を批判的に分析した報告をしたら、日本の研究者の一人が「ハンガリーに何か怒みがあるのだろうか」というようなコメントを寄せたのに驚いた。地域研究をやっている人の中には、研究対象に惚れ込んでしまう人が多い。そういう人は研究対象をペットのように扱い、対象を持ち上げることがあつても、批判はしない。批判は対象を貶(おとし)めることになると考えているようだ。もちろん、関心があるから研究するのだが、扱う対象に盲目になってしまつては、客観的な研究はできない。自らの研究対象がポーランド猫やハンガリー猫になってしまつては、社会科学にならない。

一時、北朝鮮に招待されて金日成に面会できた政治家や学者の多くが、日本に戻って金日成の崇拜者になるといふ現象が見られた。まるで自らが金日成の「操りペット」になってしまったかのよう。もう一昔前には、毛沢東の「操りペット」もいた。どうしたら、そうなれるのだろうかと思議に思つていたものだが、ペットのことを考えれば、何の不思議

の寿司屋を避けるようになった。寿司屋に猫の組合せは最悪。この不衛生さが分からないようでは、寿司屋の資格はない。

しかし、ペットを飼っている人は、どうして犬や猫が不衛生なのか理解できない。私も猫を庭で飼っているが、絶対に家の中へ入れない。陽の光が当たると良く分かるが、猫が体を掻いたりすると、無数の体毛が空中に舞い上がる。家へ入れなくても、猫の体毛が玄関付近に集積している。室内で飼つていれば、その比でないはずだ。多分、体毛だけでなく、痒みの原因である小さなダニも、雑菌と一緒に空中に舞い上がっているだろう。ダニが付着した寿司など食いたくないし、小さな子供がいる家では喘息の原因になるから気を付けなければならぬ。

とにかく、台所に動物を入れてはいけないし、動物を触った手で生ものを扱ってはいけない。目に見えない雑菌やダニが食べ物に移る。しかし、連れ合いよりもペットが可愛いと感じる人に、衛生観念のことをいくら話しても無駄なのだ。だから始末が悪い。

ハンガリーでは狭いアパートに、大きな犬を飼っている人がいる。そういう家に入ると、動物臭が漂っている。ところが、住人は慣れていて臭いを感じない。

プラハに日本料理店がまだ一軒しかなかった頃のことだ。一般公開の店舗のことだから実名で書いても問題ないと思うが、プラハの中心街に「田村」という日本料理屋が、地下に店を開いていた。同僚が、「店の中で犬を飼っているから普段は行かないのだが、他に気の利いた店がないので」と断りながら、案内してくれた。案の定、地下に降りる前に、地上階のドアを空けた途端、動物臭が鼻に衝いてきた。

もない。動物に限らず、人間は何でもペットにできるし、会えるはずのない偉い人に会つたり、経験したことのないような出来事に出会つたりすると、魔法にかかったように自らが盲目の「操りペット」になる。無批判で機械的な代弁者になってしまうのだ。戦後の日本にはアメリカ大好きで、アメリカの利益を代弁するアメリカンペットの知識人や政治家が増えたとし、最近ではブッシュの飼い犬と怪しまれている人もいる。さすがにご主人の色が褪せてきて、ブッシュペットには迷いが見えるようだ。

最後に、ペットを室内で飼っている人へ。当人や家族は致し方ないとしても、客人には自らの「不衛生観念」を押しつけないように。自らも盲目の「操りペット」にならないように注意したいものだ。

店に入ると、大きな犬がうろろろしている。これじゃ臭うはずだと納得した。客には臭つても、一緒に生活している人は何も感じない。人間の嗅覚は不思議なものだ。慣れほど恐ろしいものはない。それから何度もプラハを訪れたが、「田村」で食事する気になれなかった。もう随分と時間が経つたからあの犬はいないと思うが、もしかして別の犬が店を闊歩しているのだろうか。料理屋さん、店内でペットを放し飼いにしてはいけません。それだけで、お客が来なくなりますよ。

家の中でペットを飼っている人は、ほとんど衛生観念が麻痺している。というより、衛生観念のない人が室内でペットを飼うというのが正確かもしれない。加えて、親馬鹿というかペット馬鹿というか、「家(うち)の犬や猫は世界で一番賢く、何の病気もない」と確信している。レストランのシェフや板前が、頭髪を手で掻きながら調理していれば、誰だつて注意する。風呂に入らない犬や猫の体毛が、少なくとも週に何度か洗髪する人間の頭髪より清潔だろうか。「シェフの頭髪は不潔で、家のペットの体毛は清潔」であるはずがない。まして、口移してペットに食べ物を与えたりするのは厳禁である。同じことを客人に催促する人がいるから、ペット好きの馬鹿さ加減は、どうにも始末が悪い。

私は食事に招待した客人には、まず到着と同時に手を洗ってもらう。とくに、電車やバスで来た人には即座に無条件で。子供が庭で猫を触つたら、必ず石けんまで手を洗わせる。親が気にしない場合には、親に代わって私が洗わせる。そうしないと、食事を与えない。こうやって衛生観念を子供に教えるのも